

# 灼光のアンチジェネシス2

天草白

挿絵／桐月れおん

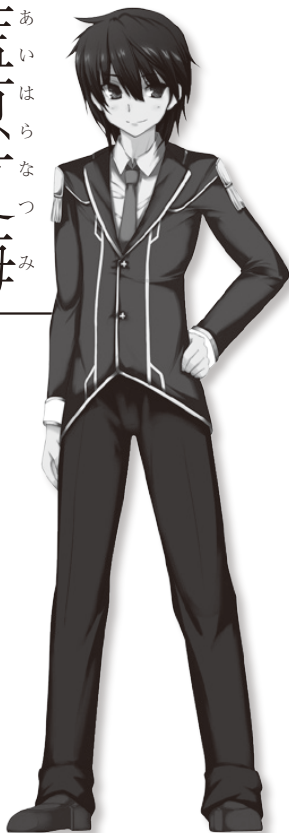


立ち読み版

# 登場人物紹介

《黒き創世》の戦いを止めるため、那々姫の使い魔となった少年。幼いころに両親を殺されており、人を殺すことに対して嫌悪を示す。

あ  
い  
は  
ら  
な  
つ  
み  
藍原夏海



ほ  
ん  
じ  
ょう  
な  
な  
き  
本条那々姫



108 つに分かれた魔王の魂を体に宿す魔王候補の一人。魔王の魂の影響で暴走した姉の江摩を自分の手で殺すため、夏海とともに戦っている。

千歳の妹であり、使い魔。両親からの虐待の影響で非常に臆病な性格になっており、千歳にだけ心を開いている。



きりさめももか  
霧雨百香



きりさめちとせ  
霧雨千歳

魔王候補の一人。祭礼学園の生徒会長を務めている才女で、那々姫に対して異常な執着を見せる。両親に虐待を受け、売春をさせられた過去を持つ。

夏海の幼馴染みの少女。魔王候補の一人で、夏海への片想いが高じて那々姫を殺そうとしたが、戦いに敗れて夏海たちと同盟を組んでいる。

みせまな  
三瀬真菜



魔王の魂を宿す108の人間と、使い魔の魂を宿す存在がパートナーを組んで戦い、次期魔王を選ぶバトルロイヤル——《黒き創世》。使い魔の魂を宿す少年・藍原夏海は、魔王候補のペアに襲われたところを、那々姫によって助けられる。《黒き創世》のこと、そして自分が使い魔であることを教えられた夏海は、魔王の魂を宿す彼女とペアを組むように迫られる。一度は拒む夏海だったが、暴走した魔王候補のペアを止めるため、那々姫と契約を結ぶ。そして、那々姫を狙う霧雨姉妹や魔王候補として目覚めた真菜と戦いながら、《黒き創世》を止めようとするのだった。

あらすじ

実際、もう少し力を入れれば直腸に進入していきそうだった。

そのとき、びくん、とひととき強く桃尻が跳ねて、夏海の指を押し返してしまう。

「やっ、だめえ……それ以上、しないで……！」

嫌々をするように紅いツインテールを振り乱す那々姫。

恥じらいの仕草が愛おしくて、夏海は真つ白な首筋や背中に軽いキスを何度も浴びせると、ヒクヒクと震える秘孔に尖った龟头をあてがった。

性器同士が接触し、ぐちゅ、と淫靡な水音が鳴った。これだけ濡れていればスムーズに挿入できるだろう。

「どうしても……この格好ですか？」

那々姫が背中越しに振り返り、抗議するようににらんだ。

夏海は小さく苦笑して、

「那々姫だって、嫌そうに見えないよ」

「あたしは別にっ！ ……ま、まあ夏海がそんなにしたいのなら、恥ずかしいけど……いいわよ」

「それじゃあ——」

承諾を得られたところで、夏海が荒い吐息混じりに腰を押し進めようとする。

が、那々姫はわずかに腰を引いて、挿入にお預けを食わせた。

「ま、待って。その前に……ちゃんとキス、してよ。ただ機械的に肌を合わせるだけなんてイヤ。今日はまだ一回もしてないし」

恥ずかしそうに目を逸らし、はあつと悩ましげな吐息をつく。

(那々姫、可愛い……)

年ごろの少女らしい可憐な仕草に心を高鳴らせ、夏海は唇を寄せた。薄桃色の唇に力強いキスを浴びせる。

恋人同士のように優しく、情熱的な口づけ。

「んっ」

憧れの美少女の柔らかな唇の感触に陶然となった。互いの舌を吸いあい、キスを堪能したところで、唇を離して一気に体重をかける。

ぬぶっ……ぐちゅううううっ！

熱く火照った切っ先でわずかに綻んだ花卉を割り開き、抵抗感の強い粘膜を、ずずずつ、と押し広げながら突き進んでいく。

「あああああっ！」

挿入の圧力で背中を弓なりに反らす那々姫。

すでに処女ではないが、あいかわらず膣孔は狭く、粘膜は肉棒を外部へ押し出そうと強烈に反発してくる。

夏海は下腹部全体にグッと体重を籠め、その抵抗に逆らってなおも押し進めた。

「ずぶり、と最奥まで膣壁をかき分ける爽快感とともに、尖りきった亀頭が膣底にコツンと当たる。」

「あふ……は、入ってくるう……太くて、大き……ああんっ！」

すでに期待感で感度が昂っていたらしく、挿入されただけで、那々姫は上体を左右にぐねらせて気持ちよさそうに喘いだ。甘ったるいため息をついて、シーツの上に上体を突っ伏す。

「ううっ、那々姫の中っ……ウネウネして、絡みついて……ああっ！」

強烈な快感を得ているのは、夏海も同じだった。

初体験以来、那々姫と何度か交わっているが、体を重ねるたびに生硬な膣が少しずつほぐれ、肉悦が増していくような気がする。

蕩けるように熱い粘膜が蠢いてペニスの先端から付け根までを心地よくくすぐってくる。粒々の多い贅肉が不規則に波打っては、肉棒のいたるところに巻きつき、搾る。

腰骨が甘痒く痺れた。

まだ挿入しただけだというのに、体の芯に電流が走ったかのように。

「くうっ、が、我慢できないっ、動くよ、那々姫！」

夏海は天を仰いでうめいた。

これ以上腰を動かさずにいると、何もしないうちに精を搾り取られてしまう。荒々しく息を吐き出すと、細くくびれた腰を両手でガッチリとつかみ、下腹部を動かした。始めた。

ぱんっ、と太ももの肉と尻肉とを打ち鳴らし、バックから抽送を浴びせていく。

「あ、ううっ、ふあああっ」

那々姫は断続的な息を漏らし、綺麗に反った白い背中を痙攣させた。

一打ちごとにその痙攣が大きくなり、上体を仰げ反らせたかと思えば、またシーツの上に突っ伏す。

非の打ちどころのない完璧な美少女を四つん這いにして、背後から貫いている——この格好で繰り出すストロークは、正常位や騎乗位にはない、獣の体位ならではの征服感をもたらしてくれた。

オスの本能そのままに、がつっ、がつっ、と最奥をえぐる。

「や、あっ……奥まで、届い……はあんっ」

出し入れのたびに、真紅のツイントールがリズムカルにひるがえり、綺麗なS字ラインを描く女体が艶めかしく揺れた。

「う、くうう……あふっ……んん、声、出ちゃ、うっ……ああっ」

思いつきり声を出すのが恥ずかしいのか、那々姫は唇を噛みしめて喘ぎを押し殺してい

る。それでも堪えきれない声が甘ったるい吐息とともに漏れ出した。グラマラスな裸体がひっきりなしに跳ね、踊る。

一突きごとに欲情をさらけだす少女の痴態に、下腹部がゾクリとなった。

背中から手を回し、下向きになってもほとんど形の崩れない二つの肉丘を、むぎゅうううっ、とつかむ。内部までみっちり魅肉の詰まったDカップの乳房が、手のひら全体にずっしりとした重みを伝えた。

驚掴みにすると若々しい弾力感とともに指先を心地よく押し返してくる。

「んっ、むね、だめえ……ヘンに、なっちゃ……あう、んっ」

さらに夏海の指先が淡い桃色をした乳首にまで到達すると、那々姫は背中をアーチ状に反らしか細い喘ぎ声を漏らした。

ずっと憧れだった少女が指先の動き一つで高まっていく。夏海自身も興奮を昂らせ、狭苦しい秘孔の奥深くまで突き刺さった肉槍が充血を増す。

「やあああッ、夏海のまた大きく……あああつ、だめ、壊れちゃうっ！」

処女を奪って以来、肌を重ねるごとに那々姫の性感は開発され、より敏感になっているようだった。

抽送や愛撫に反応して女体が薔薇色に染まっていく。

もっと気持ちよくさせたい。もっと乱れさせたい。



こみ上げる衝動のまま、さらに膨張したペニスで内側から膣内の粘膜を押し返すようにして拡張した。

「あつ、そんなに深くっ……ああつ、いや、あ……！」

ふいに喘ぎ声が細く途切れた。

ふう、ふう、と唇を噛みしめたまま小鼻を膨らませて断続的に息を漏らしている。どうやら軽くイッたらしい。

「気持ちよさそうだったね」

いったん腰の動きを止めると、那々姫は慌てたように背中越しに振り返った。

「っ……！ し、仕方なくしてるんだからねっ。これはあくまでも魔力を補充するために……ちよつと、笑わないでよ。もうっ」

拗ねた顔が愛らしくて、唇を軽く吸いつけた。プリプリとした唇は驚くほど熱く火照っている。

たちまち那々姫の顔が淡いピンク色に染まった。

「……い、いきなりキスなんてしないでっ」

今度は照れとも怒りともつかない表情だ。

「さっきはちゃんとキスして、っっておねだりしたくせに」

「それは、その……うるさい、ばか」

勝気な態度をあらわにする少女に、夏海はにつこりと笑った。ジンとした疼きが持続している下腹部を揺する。

あいかわらず膣の締めつけがキツく、射精感は高まりっぱなしだ。今度は那々姫と一緒にイキたかった。

「俺のほうはまだだから……もつと動くよ」

「えっ、ちよつと待つ……ああ、はあつ……あ、うんっ」

相手の戸惑いを無視し、イッた直後の敏感な裸身に対してふたたびピストンを開始した。ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ！

勢いよく腰をグラインドさせて叩きつけると、弾力のある左右の尻肉が太ももにぶつかってリズムカルな音が響く。

一打ちごとに起伏の激しい膣壁とカリ首が摩擦し、甘い肉悦が下腹部に広がった。

相手に肉悦を与えるだけでなく、自分もフィニッシュまで高まつて一緒に絶頂までたどり着くための動き。何度かセックスを体験する中で、夏海はそんな絶妙なコントロールを身につけていた。

「な、夏海、深すぎつ……ん、くああつ、あたし、また……イク！ だめ、イクウ！」

真っ白な上半身を左右にくなくと揺らしながら、那々姫が悲鳴を漏らした。膣内が震動して中に啜えこんでいる肉茎をギュウツと食い絞る。細い喉を震わせてエクスタシーの



絶叫を上げた。

「くうっ。う、ああっ！」

膣内の締めつけのキツさに、背筋から腰骨にかけて激しい灼熱感が一気に駆け上がる。腰の芯に電流のような愉悦がこみ上げ、あっという間に射精感が頂点に達した。

「お、俺ももうっ……イクよ、那々姫！ うああっ……あ、くうっ！」

深々とペニスを打ちこんだ姿勢で正視すると、下腹部を小刻みに痙攣させながら絶叫を上げた。ふわりと全身が浮き上がるような射精時独特の浮遊感。

瑞々しい肉洞にはまりこんだ男茎が内部から膨れ上がり、たぎりにたぎった欲望の子種を一気に噴出した。

どくどくどくっ！ どびゅっ、どびゆるうううっ……！

「はあああああっ、あ、熱いの、いっばい……出てる！ やあんっ、びゅくつて……あたしの中、夏海の精液でいっばいになるううっ……！」

憧れの美少女の胎内に遠慮なく、勢いよくおびただしい量のザーメンをほとばしらせる。圧倒的な爽快感で意識が真っ白に焼き尽くされた。

最後の一滴まで放出し尽くしたところで、夏海はようやく脱力する。

そのまま体重をかけると、重ねあわせたスプーンのような体勢でベッドの上に体を沈ませた。

「はあ、はあ、はあ……二回も、イカされちゃった……」  
背中越しに振り返った那々姫は涙目で、頬を真っ赤に上気させている。蕩けるように甘い表情だ。

美しい少女の肢体を思う存分に貪り、絶頂まで導いた事実が、征服感と充足感を同時に満たした。

「俺も、すごくよかった」

心地よい放出の余韻に浸り、ゆっくりと顔を近づけた。

那々姫のほうも心得たように顔を寄せる。

自然と唇が重なった。

「ん、ふっ……う」

互いに小鼻から甘い息を漏らし、恋人同士さながらにキスを交わす。

触れあう唇から那々姫の熱情が伝わってくるかのよう。

たっぷりと後戯代わりのキスを堪能してから、夏海は唇を離した。

「ふう」

目の前で那々姫が満足げに吐息をつく。

目尻を赤く潤ませ、頬を上気させた少女は、ついこの間まで処女だったとは信じられなほど艶めかしい表情を浮かべていた。

次の瞬間、那々姫は制服姿から魔王衣装をまとった姿へと変身していた。

このコスチュームは魔力を物質化させたもの。制服とは比べ物にならないほどの強度がある。

「フフン、あなたたちなんかの前で肌をさらす気はないわ」

勝気に顎をしゃくり、汐を見下ろす那々姫。

「これならいくらスライムが這い回っても——えっ!？」

衣装の表面からジュウツと白煙が上がった。

「あっ……う、ああああっ……!!」

どろっ……どろり……どろおおおおおっ……。

頭頂を飾る二本のツノが、背中から伸びる皮膜状の翼が、腰にうねる尾が、スライムが触れた端から溶け落ちる。

さらに那々姫の肢体を覆う露出度の高い衣装自体も、粘体が這い回った跡に沿って煙を上げながらポロポロに腐食していく。

「そ、そんな——」

「無駄だよ。このスライムは魔力を吸い取るんだ」

嘲笑する汐。

那々姫は衣装の残り部分に魔力を集中し、防御力を高めた。

こんな連中の前で全裸を披露する気はない。囚われの身になった今、それがせめてもの矜持だ。

「うっ……ああっ……はぐう」

しかし全身を覆うヌルヌルとした粘液の感触はあまりにも不気味で、つい集中力を削がれる。

気を抜くと魔力が弱まり、連動して衣装の防御力も弱まってしまう。

「ダメ……見られ、ちゃ……ああっ」

無我夢中で逃げようとするが、四肢を鉄枷で拘束されていては体を左右によじることにくいしかできない。

がしや、がしや、と鉄枷とつながった鎖が金属音を鳴らす。

(逃げられない……ああっ)

衣装の半ばまでが溶け、メロンを縦に割ったような形をした見事な乳房も、パンと張らだした腰回りも、その大半があらわになった。

「ほらほら。もつとしつかり魔力を込めて防がないと、全部見えちゃうよ」

「これ以上は……くうっ、うう……!!」

必死で気張るが、腐食を完全に防ぐことはできなかつた。

少しずつ肌の露出面積が多くなり、ぷるん、と内側から弾けるようにして右の乳房があ

らわになる。

スカートの丈がどんどん短くなつて、太ももの付け根や淡い恥毛が今にも見えてしまいうさだ。

「あらあら、意外に頑張るわねえ。並の魔王候補ならあつという間にオールヌードをさらしているところよ。大した魔力量なこと」

京香が感心したようにほほ笑んだ。

濃い紫色の扇子を片手に、ぱたぱたと扇あおいでいる。

(あたしを、どこまでもいたぶるつもりね)

余裕たつぷりの態度が癩かんに障さわった。

どろり……どろおおおつ……どろり。

気色の悪い薄緑の粘体はなおもアメーバのように全身を這いながら、残りのコスチュームを完全に溶かし去ろうとする。

ふいに、急激な脱力感が那々姫を襲った。

「こ、これは……!?!」

腕が、脚が、体全体が突然気だるさに襲われ、意識がぼんやりと薄れる。

「魔力は強いけど、コントロールが未熟そうだね。もう息が上がってるよ」  
汐がにやりと笑った。





「っ……!!」

確かに那々姫は強大な魔力を十分に制御できているとは言い難い。夏海と契約する前は、暴走気味の魔力に影響されて発情状態になってしまったこともある。

どくん、どくん、と心臓の音が異様に高鳴る。

スライムに対抗しようと魔力を使いすぎたのだ。

下腹部全体が甘く火照りだした。

女としての生々しい欲情が上昇を始めている兆しだ。

「目元がトロンとしているよね。ふふ、楽しんでよ。その澄ました顔がどんなふうに変わっていくのか。一皮剥けばただの淫乱なんじゃないかな？」

「あ、あたしは淫乱なんかじゃ……! 取り消し、なさ……はあつ、はあつ……!」

「やせ我慢がいつまで続くか、見ていてあげるね。——やれ、スライム」

ただでさえ露出度の高い衣装は、スライムが這い回った跡に沿って無残に消失していき、まだ申し訳程度に乳房や股間を隠しているものの、ほとんど全裸同然にされてしまう。

乳首や秘所以外はほぼすべての肌をさらしている今の姿は、ある意味でオールヌードよりも扇情的だ。

(こんなヤツらに——)

悔しさで胸の奥が灼熱した。

もはや魔王衣装をもう一度具現化するだけの魔力は残っていないかった。

いや、仮に具現化させたとしても、今度は魔力の使いすぎによって今以上に欲情を呼び覚まされ、理性のほう吹き飛んでしまうだろう。

こんな連中の前で、淫らにヨガリ狂う姿を見せるくらいなら、全裸をさらしたほうがいくらかマシだった。

「いいザマだね」

汐が鼻を鳴らして真っ白な裸身に視線を送る。

スライムはあらわになつた乙女の柔肌に直接まとわりついてきた。

「だ、ダメ、来ないで……ああっ、イヤ！」

女子校生ならではの張りりと弾力を備えた豊満な肉丘の表面を、ヌルヌルとした感触が這い回っている。

おぞましさに肌が粟立った。

夏海の唇や指で愛撫されたときはあれほど幸せな気分浸れたというのに、今は気色の悪さしか感じない。

それでいて乳房の頂点がゾクリと疼くような感覚は、悪寒などではなく——認めたくはないが、明らかに快感の類だった。

（あ、あ、あ、魔物に觸ふられて気持ちよくなってる……!!）ち、違う、そんなことあるはずが

ないわ！)

内心の疑念を、理性で否定する。

スライムはこんもりと盛り上がった左右の膨らみにねっとり絡みつき、乳房の球面やわずかに残った衣装に隠された乳首の周辺にまでまとわりついて、淫靡に濡らしていく。

「ふふ、那々姫ちゃんのおっぱい、すごくいやらしく光ってる。乳首もそんなに尖らせて……よっぽど気持ちいいんだね、この淫乱」

「あ、違っ……やあああっ……」

しかし那々姫の意志とは無関係に、豊満な双丘の頂点はジンジンと疼き、性悦の熱を増した。

衣装の下でひとりでに起き上がっていく薄桃色の乳首を見下ろし、悔しさに唇を噛みしめた。

「あらあら、乳首が勃ってきてるんじゃない？ 那々姫ちゃんったら、澄ました顔してエロいのねえ」

嘲笑を送ったのは京香だ。

無理やりに性感を引き出され、その様子を逐一観察されている屈辱で、頭の芯がカッと燃え上がった。

(悔しい……こんな、いいようにされて……！)

「胸の次はお尻かな？ 体中のあらゆる場所から性感を引き出して、魔力を限界まで搾り取ってあげる。手を緩めるな、スライム」

汐は薄緑色の魔物に無慈悲な命令を下した。

ジュウツと白煙が上がった。

スカート状の衣装や股間を守る残りわずかな布地がどんどん腐食していくのを見下ろし、ゾツとなる。

「ダメ、これ以上は……ううっ」

やがて乳首と秘所を守る最後の衣装が水溶性の紙のように溶け消えた。とうとう敵の前で一条まとわぬ姿にされてしまったのだ。

「へえ、ほんとに綺麗な体だね。乳首もアソコもピンク色だ」

汐が口笛を吹いて感嘆の声を上げる。

（ああ、こんな連中の前で裸を……！）

屈辱的なストリップに、那々姫は敗北感で打ちのめされた。

無防備になった下腹部をスライムが我が物顔に這い回る。ヌルヌルとした触感が双尻の辺りでのたくついていた。

「く、ああっ……イヤっ！」

尻の割れ目に沿ってヌルリとしたものが染みこんでいくのを感じ、那々姫は眉間にしわ

を寄せて叫んだ。

「ほらほら、もつとお尻に力を入れないと奥まで入っちゃやうぞ」

「ふああつ、ダメ、そ、そんな場所……んん、くうっ！」

これ以上侵入されないよう、臀部に力を入れて肛穴をキュッと閉じる。

が、アヌスを締めたところで完全に塞ぐことなど不可能だ。スライムは粘体という体の特性を活かし、わずかな隙間から侵入を開始した。

液体と固体の中間のような感触が肛門をじわじわと広げながら、内部に押し入ってくるのが分かった。

直腸の粘膜にくすぐったさにも似た心地よい疼きが広がる。

「あああ……あ、くうう……何、これ、え……あんっ！」

排泄の器官に魔物が侵入してくるおぞましさと裏腹に、腹の奥がゾクゾクするような愉悅を意識しないではいられなかった。

「スライムにお尻を弄いじられて感じるなんて。いかにも清純派って顔なのに、意外とエッチなんだね」

「ふふ、分かってないわねえ。こういう処女っぽいコのほうが実は淫乱な素質があるのよ。オマ○コもトロトロに濡れてるんじゃないかしらあ」

京香が嬉しそうに口元を緩め、スライムにいたぶられる那々姫を見つめた。

薄くほほ笑んだ唇の下にある黒子ほくろがやけに蠱惑的だ。

「可愛いわあ、ホント。肌なんてピチピチして……！ 儀式が終わったらおねーさんとベツドでたつぷり楽しませようねえ」

「残念だけど、儀式が終わるころには魔力を吸い尽くされて干からびてるよ」  
表情一つ変えずに告げる汐。

「簡単に殺されるわけには……う、くうっ……い、いかないのよ、あたしはっ……！」  
那々姫はキツとした顔で叫んだ。

そう、彼女はまだ《黒き創世アランチネシス》での目的を果たしていない。  
姉をこの手で倒すまで、死ぬわけにはいかない。

それに何よりも――。

脳裏に浮かぶ、同級生の少年の顔。

「この期キに及んで気が強いね」

汐はふんと小さく鼻を鳴らして那々姫を見返し、それから京香に視線を移した。

「亡骸なきがらでよければいくらでも可愛がればいい」

「ふふ、いくらアタシでも屍姦しかん趣味はないわよお」

「好き勝手なこと。んっ……い、言っ……はぐうっ！」

浅いところを弄っていたスライムがヌルヌルと蠕動ぜんどうしながら、肛門の最奥にまで一気に

潜りこんでくる。

乳房とアナルへの二重刺激――。

処女ではないが、まだまだ性的に初心うぶな乙女にとって、拷問にも等しい責めだった。

アナルの奥深くまで押し入れられても、スライムの体が柔軟なためか痛みはまったくなかった。腸粘膜を内側から押し広げられていく拡張感はあるものの、それは必ずしも不快なものではない。

ずるっ、ずるうううっ……ぬるり、ねとおおっ……じゅぷううっ……!

夏海に弄られたときは、恥ずかしいのにどこか胸がときめくような陶醉を感じたが、今はただ気持ち悪いだけだった。

そう、気持ち悪くておぞましいだけだ。

なのに――菊穴から腸奥までを、ウネウネとした感触が出入りするのは、排泄の快感に似た快感を下腹部にもたらした。

(どうして……お尻、気持ちいい……!?)

腰の奥にこみ上げる甘痒い愉悅が初心な少女を戸惑わせる。

「やめて……! やめなさいっ……!」

懇願の声は、自分でも驚くほど力が籠もっていなかった。

自分でも薄々と感じていた。心の片隅で、肛門性感という未知の肉悦に対する好奇心



と欲望とが顔を出しているのだ、と。

感づいていながらも、認めたくはなかった。

ゾクリと下腹や腰骨が甘く震え、内部から痙攣する。

「ダメ、これ以上、はあっ……あうんっ」

おぞましい魔物によって絶頂まで導かれてしまう予感にうめき声を漏らした。

女として最大の屈辱が自分の身に迫っていることを悟り、グラマラスな裸体が激しくわななく。直腸の粘膜がひとりでに波打って止まらない。

ビクビクと細かい振動を繰り返す内壁をヌルヌルとした感触が通り抜け、心地よい摩擦感を染みこませた。

「ああっ、イイ！ イイのっ、うぐう、んっ！」

肛門の奥が甘痒い快感に浸され、熱い嬌声をこぼす。

もう耐えられない——。

理性が断末魔を上げると同時に、絶望と解放感の入り混じった奇妙な快感が脳天から爪先までを激しく貫いた。

「ダメ、こんなので……ああ、イク！ イクうっ！ ふあああああ……！」

魔物によってもたらされたオルガスムスによって意識を真っ白に塗り潰される。

信じられないほど鮮烈な絶頂感——。

「ん、ちゅ、むう……んんっ」

三人の唇が三角形を描くような形で熱烈なキスを交わし合う。

那々姫と真菜は女同士で唇をぶつけ合う格好だが、そんなことも気にならないほど夢中なのか、互いに相手を押しつけるようにして夏海の唇を吸いつづけた。

「んっ、れろ……三瀬さんには、渡さな……むう、はむ、んっ」

「れるおおおっ、んちゅ……なつ、み、わたしと……もつと、んむう」

二本の舌が同時に唇をこじ開け、口内に押し入ってくる。

（ふ、二人とも、激しすぎ……うう）

那々姫と真菜が気落ちしている自分を精いっぱい慰めようとしてくれるの伝わってきて、それが何よりも嬉しかった。同時に、いずれ劣らぬ美少女から競い合うように口づけを求められるのは、男として光栄という他はない。

ただ、ここまで遠慮なく競われるとタジタジになってしまうのも事実だが。

「ふううううっ」

長いキスをようやく終えると、三人とも息も絶え絶えだった。

「はあ、はあ……」

興奮に上気した顔で、視線の火花をぶつけ合う二人の少女。

夏海のほうも激しいキスの興奮で海綿体の充血がさらに増し、膨らみきった若茎はへソ

にくつつかんばかりの雄々しい角度でそそり立つ。

「あ、夏海の……また大きくなってる。わたしがもつと気持ちよくしてあげるね」  
それを目ざとく見つけた真菜が嬉々として跪ひざまずいた。

「あ、ちよつと！ 何抜け駆けしてるのよっ」

「ふふ、恋人の義務、みたいなの？」

「いつあなたが夏海の恋人になったのよ！」

「ちゅ……れる、んんっ……夏海の味、あむう……濃くて、すてき……んんっ」

真菜は那々姫の抗議を無視して、甘い吐息を幹に吹きかけながら、すでに先走りの液でヌルヌルと濡れ始めている亀頭にチロリと舌を這わせた。

「う、んんっ、ちゅ……んふ、もつと大きく、なつて……れるお」

先端から付け根までを一通り舐めてから、口をOの字に開けて赤黒い先端を飲みこむ。

たちまち鋭敏な亀頭が温かな口腔粘膜に包まれ、ペニスの芯に熱い愉悦が走った。

ぴちゃ、ぴちゃ、と猫がミルクを舐めるような音を立てて、真菜が丁寧ていねいに舌を走らせていく。尖った舌先で鈴口を押し広げ、くすぐったかと思えば、カリ首の溝に沿って舐め上げる。

唇で太幹を締めつけながら付け根まで飲みこみ、腔に挿入しているときに似た抽送の愉悦を送りこむ。性行為には縁遠そうな幼なじみが見せる、驚くほど巧みなフェラチオ。

「くううつ、こ、こんなの……真菜、いつの間に——」

「んちゅ……い、言つたじゃ、ない……れる……夏海のために、予習し……ちゅう」

そういえば初体験のときに、いつかこうなるときに備えてエッチな本などで勉強していたと真菜が告白したことを思い出す。

この間のシックスサインである程度コツをつかんだのかもしれないが、それにしても熟練した舌遣いは見事という他はない。柔らかな舌肉が絡みつくと、鮮烈な肉悦が下肢全体に燃え広がり、夏海は天を仰いでうめいた。

「三瀬さんにされるのがそんなに気持ちいいんだ？ あたしがしてあげたときよりも気持ちよさそうな顔して……もうっ」

それを横目で見ていた那々姫が、不満げな顔で口を尖らせた。

「な、那々姫、なんか拗ねてない？」

「拗ねてるわけないでしょ、ばかっ。あたしは、べつに、や、ヤキモチなんて……」

「いや、そこまで言つてないけど」

「う、うるさいうるさいっ」

息遣いがどんどん荒くなる。

那々姫の顔は今にも湯気を立てそうなほど真っ赤に染まっていた。

「なんだか、ときどき体が疼いて……へ、へんなの、あたしい……んんっ」

モゾモゾと下腹部を揺する。

「那々姫……?」

明らかに態度が変だった。初めて経験する3Pというシチュエーションに気持ちを高鳴らせているのかと思つたが、それだけではないらしい。

「あ、あたし、スライムに体を……そ、それで、あの……後遺症がまだ……あうんっ、か、体がエッチに……火照りっぱなしで……うう、くう」

恥ずかしそうに顔を伏せ、夏海に抱きついてくる。

裸身を薔薇色に染めて発情をあらわにする少女に、心臓が鼓動を速めた。ドギマギとしながら那々姫を抱きとめる腕に力を籠める。

そういえば、地下神殿から彼女を助け出したときも様子がおかしかった。戦場であるにもかかわらず「抱いて」などと言ひ出したのは、きつと後遺症のせいだったのだろう。それがまだ体に残っているようだ。

「ちゅ、れるお……んむっ……おつきい……あんっ、ビクンって……んんちゅ」

一方で足元では真菜が一心不乱に舌を蠢かせ、完全に勃起した肉茎の先から根元までを丁寧舐め上げる。

「ふふ、わたしとするほうが……ちゅ……気持ちい……んんっ……よ、ね?」  
フェラチオの合間に優越感をにじませる真菜。

「……なんだか見下されてるみたいに聞こえるんだけど？」

「だって夏海、わたしとエッチしてるときは本当に気持ちよさそうだったもん」

「あ、あたしとしたときだって……ううん、あたしとしたときのほうが三瀬さんよりもよかったですね、夏海っ？」

真菜の挑発に刺激されたのか、那々姫は頬をカッと紅潮させた。

「いや、えっと、その……」

正直言つて、二人の美少女はともに魅力的すぎて甲乙つけがたい。どちらが上、などと簡単に決められる問題ではなかった。

「あたしのほうが、夏海を気持ちよくさせられるんだから……！」

憤然と叫んで、真菜の隣に跪く那々姫。

「え、ちよつと那々——うわっ!？」

柔らかな舌肉がペニスの中腹に巻きついてくる。真菜だけでなく那々姫までもがフェラチオに参加したのだ。とびつきりの美少女二人から同時に口唇奉仕を受けるという夢のよくなシチュエーションに、頭がクラクラとなる。

那々姫の舌が鈴口の辺りをチロチロとくすぐったかと思えば、真菜の唇がねつとりと唾液の跡を残しながら幹を這い回った。

普段いがみ合っている割には絶妙のコンビネーションを發揮する二人のフェラチオによ

つて、夏海の性感はいやが上にも高まっていく。

さらに那々姫は真菜よりもサイズで勝る二つの乳房を自分の手で持ち上げた。

むちっ、むにいいいいっ！

真菜のフェラチオを押しつけてペニスを独占すると、そのままパイズリを敢行した。

「くううっ、那々姫のおっぱい、や、柔らかくて……あうっ」

先ほどまでのねっとりとした口唇愛撫から一転、乳肉奉仕特有の緩慢な圧迫感がペニスに一味違う刺激を送りこんでくる。

「あたしならこういうことも……んっ、く……し、してあげられるん、だから、ねっ」

那々姫が息を弾ませ、真っ白な双丘をいやらしくたわませながら肉棒を包みこみ、甘く摩擦した。

「ち、ちよつと、独り占めしないでよ！ ソレはわたしのなんだからっ。ち、ちよつとくらいい、おっぱいが大きいからってえっ！」

不満げに叫んだ真菜がふたたび恋敵を押しつけ、パイズリから解放された肉棒を貪るよううにして啜えこむと、激しいフェラチオに戻る。

「夏海はあたしのモノよ！ 勘違いしないで……ちゅ、むう、れろおお……」

那々姫のほうもムツと口を尖らせ、奪い返さんとする勢いで肉棒に顔を寄せて、二人がかりの口唇愛撫が再開された。

ちゅ、れろっ……ちゅぷ、じゅぷううっ、ちゅぼっ！

美少女二人が桜色の唇と舌をペニスの全面に這わせ、淫らな水音を響かせる。

「すごい、二人とも、こんな……ああ、イイ！ 気持ちい……うあっ！」

ズキン、ズキン、と腰の奥がひっきりなしに疼き、甘ったるい快感が下肢全体を震わせた。膝の辺りはガクガクと笑いつばなしで、気を抜くと快感のあまりその場にへたりこんでしまいそう。

「くうっ、こんなの……那々姫も、真菜も、気持ちよすぎ……あううっ」

夏海の昂りを感じ取ったのか、那々姫と真菜はますます発奮して唇と舌を怒張した器官に絡みつかせた。

「れろっ、ちゅばっ……なっ、み……あたしに……出し、んっ……め、命令……ちゅ」

「んちゅ、夏海、イッ……て、れろ……わたし……んっ、口に……出し……んんっ」

柔らかな二本の舌がペニスの先端と付け根で同時に跳ね、這い回り、一人でのフェラチオよりもはるかに濃密に、いくつもの性感を連続して責めたてる。

下腹からこみ上げたマグマのような衝動は噴出先を求め、輸精管の中で荒れ狂った。

「ああっ、ダメだ、もうっ……うう、ぐっ」

急上昇する射精感に、夏海はあっという間に限界を迎える。

二人の美少女の唇と舌から強引にペニスを引き離すと、そこで絶頂に達してたぎりきつ





た衝動を解放した。

どくどくどくつ、どびゅううううううつ！

若さにあふれた勢いのある射精。

圧倒的な放出量によって、下肢全体が心地のよい浮遊感に包まれた。

「きゃつ、こんなにたくさんつ……!!」

「あんつ、熱い……はああ」

足元に跪いている那々姫と真菜の顔に向かって、おびただしい量の精液が吹きかかる。

鼻や口、頬、額、さらには綺麗な髪の毛にまで……清楚な美貌のあらゆる場所を淫らな

白濁に染め、二人の魔王候補はともに満ち足りた吐息を漏らした。

「ふふ、いっぱい出して……くう、あふ……くれたね、夏海」

真菜がうつとりとした笑顔で口元に付着した白濁をぺろりと舐め取った。

「はあ、はあ、すごい……夏海の、せーし……なんて濃い……んっ」

那々姫のほうも息を乱しながら、蕩けた表情で夏海を見つめている。

「ねえ、今度はこっちに——夏海の、欲しいな」

真菜はベッドに上がって四つん這いになり、引き締まった尻尻を思いつきり掲げた。

大胆なポーズを取ってさすがに恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にして背中越しに振り返る。

「ね、夏海も一回くらいじゃ物足りないよね？ わたしの体、好きなように使っているだよ？ 全部受け止めてあげるから、何回でも出して……」

「引っこんでいて、三瀬さん。夏海はあたしの使い魔よ。こういうのは、あたしの役目なの」

トロンと瞳を細めていた那々姫が、ムツとした顔になって真菜の傍で同じように這いつくばった。

「え、ちよつと、那々姫まで——」

「さあ、どっちを選ぶの？」

むつちりと肉づきのよいヒップを掲げた様は、まるで性奴隷のよう。

真菜の行為を挑発と受け取ったのか、普段の彼女らしからぬ大胆な仕草だった。

四つん這いの二人を見下ろし、ムクムクと充血するペニス。

これほどの美少女二人を相手にしているのだ。欲望が膨れ上がるのは当然だった。

「ねえ、あたしよね？ 夏海はあたしと、え、エッチしたいよね？」

「わたしとするほうが気持ちいいでしょ？ いっぱい搾り取ってあげるからね」

真菜の言うとおり、一度くらいの射精では確かに物足りない。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公の活躍は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



3次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



ニャックンリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!  
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



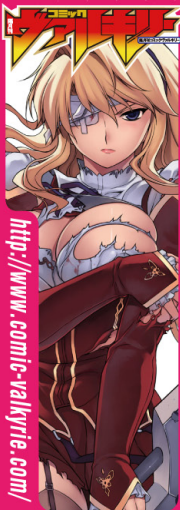
# 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!